

天国のあなたへ——樹々に癒される日をありがとう——

石幡 悦子 福島県福島市 八十歳

国破れて山河あり。戦後七十年を迎えた今日、私もついに八十路となりました。

与市さん、あなたが空へと旅立つてから十一年の月日が流れました。早いものですね。二人の子供もそれぞれの家庭を持ち、みんな元気です。私は今、一人暮らしですが、年相応の故障はあっても何とか書の教室を続けていられるのは有難いことと感謝しています。

それは私達と共に風雪に耐えた五十余年、私の心の会話に寄り添ってくれた二本の樹木に癒されているお陰は大きいと思います。

与市さん、あなたは十代の若い日に特攻隊の一人として戦いに趣かれましたが、奇しくも戦友の魂を抱いての生還となり、その悲しみは如何ばかりでしたでしょうか。そんなあなたに故郷の樹木はただやさしい風を送ってくれたという話を私は生涯忘れません。

当時、十才の私もまた、二十一年五月、東京最後の大空襲で全焼。生命ながら父の田舎に身を寄せました。やがて迎えた八月十五日。真夏の太陽の下、校庭の真ん中で聴いたのが敗戦の報せでした。あの日も蟬が賑やかに鳴いていましたが、その檜の木は微動だもせず、私達を見守ってくれていました…。

やがて私達は縁あって共に暮し、二人の子供の誕生を祝しての記念樹が今、みごとな樹木となりました。娘の泰山木は春にはみごとな真白な大輪の花を咲かせます。息子の金木犀の香は、きつとあなたの国へも届きますよ。ありがとう。私は今この樹々と幸せに生きています。